

束皙の文学

著者	佐竹 保子
雑誌名	集刊東洋学
巻	76
ページ	42-60
発行年	1996-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132509

東 哲 の 文 学

佐 竹 保 子

はじめに

『竹書紀年』などのいわゆる「汲冢書」の校訂者であり、また杜佑を「東氏の説は、礼に暢ぶ矣」と感嘆させた礼の専門家でもある西晋の東哲（二六四年頃―三〇三年頃）は、近年陶淵明の先驅者としても注目されている。だが、陶淵明のテクストが炎を内に潜めつつも静謐で閑雅な面持ちを呈するのに対して、東哲のそれはより激越な形で風刺を前面に出す。現存する彼のテクストの中で、唯一穏やかな叙情性を湛えるのが、『詩経』の逸詩を補ったとする「補亡詩」であり、これは『文選』の韻文部門の劈頭を飾っている。東哲という一人の書き手のもとに、古典学、風刺文学、『補亡詩』という三つの面がどう統合されているのか。それは陶淵明の文学とどのような差異を持ち、六朝文学全体にどう関わっているのか。小論はこれらを考察する試みである。

ある。

一 農事詩賦と「勸農賦」

東哲のテクストの中でも風刺性が強いのが「勸農賦」〔芸文類聚〕卷六十五〕である。これは管見の限り、「勸農」と題する韻文の嚆矢に当たると見られる。これに続くのが陶淵明の「勸農詩」である。

「勸農」と題する現存の韻文は、唐以前には右の二作に止まる。だが、農事を題材とする韻文は、すでに『詩経』にあらわれる。「勸農賦」を検討するに先立ち、『詩経』から六朝までの農事詩の流れを簡単に追ってみた。

『詩経』の農事詩は、大きく二類に分けられる。一つは、小雅の「楚茨」や「信南山」、周頌の「豊年」のように「收穫後の祖廟の祭祀を中心としたもの」で、「祭儀のかな

り詳密な描写があるけれども、農耕そのことが直接詩の前面に出てゐない憾みがある。いま一つは、田起こしから収穫までの農事そのものを追った詩で、小雅の「甫田」や「大田」、周頌の「載芣」や「良耜」がそれにあたる。幽風の「七月」の第一章、第六章、第七章も加えられよう。

『詩経』の後者の詩群は、農事に関する時季ごとの主要なモチーフを共有している。たとえば田起こし、現場への乾れ飯の供与、収穫物の野積み、祖廟への祭祀など。その意味でモチーフの類型性は免れないが、しかしその描出の仕方はそれぞれに個性的だ。中でも際だつのが、小雅の「大田」である。

大田多稼、
既種既戒、
既備乃事。
以我覃耜、
俶載南畝、
播厥百穀。
既庭且碩、
曾孫是若。

広い畑は収穫が多い
種を選び農具を整え
準備ができたならさあ仕事だ
私のするどい鋤で
南の畝からとりかかり
この百穀を種まけば
もうすつくと大きくなる
曾孫が時季に順うから
膨れた 黒い実だ
堅くなった すつかり揃った
雑草を生やすまい

去其螟螣、
及其蟊賊、
無害我田穡。
田祖有神、
秉畀炎火。

ずい虫と葉食い虫を取り除け
根切り虫も
我が畑の幼い稲をそこなうな
畑の神に靈力があれば
取って炎にくべてくれ

有渰萋萋、
興雨祁祁。
雨我公田、
遂及我私。
彼有不穫穰、
此有不斂穧、
彼有遺秉、
此有滯穗、
伊寡婦之利。

雲がもくもく
雨がしとしと
私のお上の畑にふり
やがて私の畑にも
そちらに取らない幼い稲
こちらに拾わない刈り稲
そちらには遺された稲束
こちらには落ち穂
それは男手のない女たちの取り分

曾孫来止、
以其婦子、
饁彼南畝、
田畯至喜。
来方禋祀、
以其騂黑、
与其黍稷。
以享以祀、
以介景福。

曾孫がやってくる
妻と息子を連れて
あの南の畝にかれいいを送れば
田畯が喜ぶ
さあ四方の神を祭ろう
赤牛と羊と豚で
うるち黍やもち黍をそえて
捧げまつり
大きな幸せを授からう

類型的なモチーフに加えて、害虫の駆除、めぐみの雨、落ち穂拾いの情景を織り込んでゐる。第二章の最初の二句の「既く既く」の繰り返しには、作物の毎日の成長への喜びが、弾むように表現されている。

だが『詩経』の農事詩は、少なくとも毛詩学派の説で読む限り、ある強固な枠組みの中にある。「大田」に二首先立つ「信南山」の第四句目の「曾孫」に、毛伝が「曾孫は成王なり」と解説している。鄭玄はそれを受けて「大田」の第一章と第四章に登場する「曾孫」を「成王」だと説明する。春の田起こしの頌歌は、同時に時季に「是れ若（したが）う」成王への賛歌であり、秋の稔りも「彼の南畝に饁す」る成王への賞賛とともに歌われる。そもそも成王は、農事の神である后稷の子孫で、「曾孫」という呼称もそこから来る。成王のみならず周の王室は后稷の後継者ということになるから、后稷への祈りを込める農事は、王室の国家的行事となる。周頌の「載芣」の毛序には、明確に「春に籍田して社稷に祈るなり」とあり、王者の籍田の行事を歌うものとする。

『詩経』の農事詩を王者の行事への頌歌と読む毛詩の枠組みは、以後の農事詩をも規定する。漢から六朝末期までの現存の農事詩は、そのほとんどが帝王の籍田を歌ったものである。束皙より二十歳ほど年上の潘岳も、「籍田の賦」

（『文選』巻七）を書いている。九百余字に及ぶこの長編の眼目は、洛陽から籍田の地に至るまでの天子の行幸のきらびやかさと、それを見に集まる群衆のにぎわしさを描くことにある。耕作それ自体の描出は三十余字にすぎない。

於是我是皇、
かくてわが皇帝は

乃降靈壇、撫御耦。
壇に降り給ひ、二本の鋤を持つ

坻場染屨、洪縻在手。
泥土が靴を染め、牛の手綱が手に

三推而舍、
三度推して止めれば

庶人終畝。
庶民が田起こしを全うする

貴賤以班、
身分によって

或五或九。
五度だったり九度だったり

「大田」を始めとする『詩経』の描出の方が、はるかに具體的で生き生きしている。

宋代には謝莊と顔延之が、同題の「東耕に待す」を残している。やはり籍田を歌う詩である。六朝後半には、梁の武帝の「籍田」詩、同じく簡文帝の「籍田に和す」詩、陳の張正見の「籍田に従い衡陽王の教に応じ作る」という五章の詩がある。謝莊詩以下は、耕作それ自体よりも朝まだきの郊外の春景を描くことに熱心であり、ことに武帝以後はその風景描写がいよいよ瀟洒に冴えわたってくる。だがいずれも、農事を王者の行事ととらえる毛詩以来の枠組みから自由になれていない。

以上のような農事詩の流れから、相互に対照的なベクト

ルで逸脱しているのが、東哲と陶淵明である。

陶淵明の「勸農」六章や「癸卯の歳の始春に古き田舎を懐う」二首其の二などに、時の帝王の影は無い。たとえば「勸農」六章。最初の二章で、農業は、自足が失われた不完全な世界を補う救いと位置付けられる。救いの場である大地は、第三章でこよなく美しいものと称えられるが、それに向き合うのは帝王ではない。「衆庶」の一人である自分自身である。農事とは、自分と大地とのかかりにほかならない。

熙熙令德、
猗猗原陸。
卉木繁榮、
和風清穆。
紛紛士女、
趨時競逐。
桑婦宵興、
農夫野宿。
氣節易過、
和沢難久。
冀缺攜儷、
沮溺結耦。
相彼賢達、
猶勤慤畝。

よろこびのめぐみよ
茂る大地よ
草木は榮え
やさしい風は清らか
たくさん男女が
季節を追って競い来る
桑摘み女は早起きし
農夫は畑に泊まる
季節は過ぎやすく
穏やかな湿りは続かない
冀の缺は（草取りに）妻を携え
長沮と桀溺は鋤を並べた
あのすぐれた人たちすら
なお田畑にいそしんだ

矧伊衆庶、
曳裾拱手。

農事は「曾孫」である王者の手から、自らの手に取り戻され、自らが自足した理想世界に近づく第一歩となる。

では、陶淵明に百年ほど先立つ東哲においてはどうか。陶淵明と同じ「勸農」と題するその賦は、農事を勧める役人について歌っている。

惟百里之置吏、
各区别而異曹、
考治民之賤職、
美莫当乎勸農、
專一里之權、
擅百家之勢、
及至青幘禁乎游惰、
田賦度乎頃畝。
与奪在己、
良薄決口。
受饒在於肥腴、
得力在於美酒。
最後の二句が分かりにくい、
下が次のように続くからだ。

ましてこの凡人が
裾を引き手を拱いていられようか

百里（の県）ごとに役人を置き
区分けして役務を振り当てるが
民を治める下役人の仕事を考えた時
勸農ほどおいしいものはない
一つの村里の権力を我がものに
百の家の権勢をひとりじめ
背い旗が怠け者を戒め
税のために畝をはかる時期になると
制裁与奪はおのがもの
酒の善し悪しが口先を決める
利益を受けるには肥えた干し肉次第
助けてもらうにはうまい酒次第
最後の二句が分かりにくい、
下が次のように訳したのは、以
農場の仕事が終わる
租税が運ばれて
村おさをただし

召閭師。

条牒所領、

注列名諱。

則豚鷄爭下、

壺檻橫至。

遂乃定一以爲十、

拘五以爲二。

蓋

由熱咬紆其腹、

而杜康啞其胃。

里のかしらを呼び
なわばりを帳簿に記し

その下に名前を連ねる時などは

豚と鶏が争つてもたらされ

壺や酒樽がわけもなくやつてくる

かくて一を十と決め

五をまとめて二とする

思うにそれは

熱々のご馳走がその腹にまつわり

酒がその胃を笑わせているため

田の広さや土壌の質で租税の多寡が決まるなら、帳簿には、
実際よりも田は狭く、質は悪く、納税は多目に記すのが、
「杜長」や「閭師」の利益になる。帳簿をごまかしてもら
うために、「豚鷄」の「肥脯」、「壺檻」の「美酒」が届け
られる。その様相を描くのが「則」以下の二句であり、
「遂乃」二句は帳簿のごまかしをいうものだろう。つまり
これは、「勸農」の役人の不正を暴露した賦なのである。

ここには、農事を帝王の行事とする伝統的な勿体ぶった
仕草はない。その仕草ゆえに、農事の具体的な描出からど
んどん乖離していく叙述の退化とも無縁である。だが同時
に、農事を自らの実存との関わりでとらえる陶淵明の深い
内省の目も存在しない。ここにあるのは、即物的な事象へ
の鋭い凝視であり、それを「鄙俗」と「時人」に疎まれる

ほどの迫真性で描き出す叙述力である。この痛烈な現実風
刺は、むしろ同時代の王沈の「釈時論」や魯褒の「錢神論」
に近い。東哲と陶淵明のテクストはともに、農事詩の伝統
の足枷を振りほどいているが、そこから自らの内部に沈潜
していく陶淵明に対して、東哲のテクストのまなざしはひ
たすら外部の現実へと向かっている。

二 「貧家賦」

外界に突き刺さるまなざしは、東哲の「貧家賦」にも窺
える。貧しさをテーマとした韻文は、陶淵明にも「詠貧士」
を始め幾首かの詩がある。晋代にはほかに、張望と江道
の詩が『芸文類聚』卷三十五に残っている。それらすべてに
先んずるのが、漢の揚雄の「逐貧賦」(『芸文類聚』卷三十
五)である。

揚雄の「逐貧賦」と晋代のテクスト群との差異は、貧し
さを「徳」とする前者の道学臭が後者に薄いことだ。「逐
貧賦」は、「揚子」と、擬人化された「貧」との対話から
成る。「揚子」は「貧」に、「人皆文繡あるも、余が褐は完
からず。人皆稻糧あるも、我のみ独り藜藿す」、「身は百役
に服し、手足は胼胝あり。或いは耘(くさぎ)り或いは耜
(つちか)い、体を露し肌を露わす。朋友道絶え、進官凌

遅す。厥の咎は安くに在る、職（まこと）に汝之を為す」と貧苦を訴える。「貧」は答える。「帝堯」の頃は「土の階に茅茨のやね、彫らず飾らず」という質素さだったが、「爰に季世に及び、其の昏惑を縦いままにす。饕餮の羣は、富を貪り苟めに得」る驕慢が瀾漫した。「貧」は「是を用て鵠逝し、其の朝を踐まず」、「揚子」のもとに身を寄せ「桀跖も顧みず、貪る類も干さず。人皆重ねて閉づも、子のみ独り露居す。人皆慌惚たるも、子のみ独り虞れ無し」という安逸をもたらしした。それなのに「我が大徳を忘れ、我が小怨を思う」のか、と。説得された「揚子」は「席を避け辞謝し」、「長えに爾と居り、終えに厭極すること無からん」と願う。「貧」と「苟得」を、善と悪に振り分けて対置させる構図である。

だが晋代のテクストは、貧しさを單純に「徳」としない。陶淵明の「怨詩楚調、廬主簿・鄧治中に示す」は五十年の生涯の苦難を述べ、七句目から結句までを次のように歌う。

炎火屢焚如、
螟蟻恣中田。
風雨縱橫至、
收斂不盈匳。
夏日長抱飢、
寒夜無被眠。
造夕思鵲鳴、

炎はしばしば燃えさかり
イナゴは畑の中で好き勝手

風雨が我が物顔で荒し回り

収斂は小屋にもみたくない

夏の昼は空きつ腹を抱え

寒い夜は蒲団も無く

夕方になると鵲の朝を告げる声が待たれ

及晨願鳥遷。
在已何怨天、
離憂悵目前。
吁嗟身後名、
于我若浮煙。
慷慨独悲歌、
鍾期信為賢。

朝には鳥がねぐらに帰る時が待たれる
自分のせいで天を怨むことなどできず
悲しみにくれ目の前のことを嘆くばかり
ああ死後の名声など
私にはただようもやも同じこと
胸をつまらせ人知れずエレジーを歌う
鍾子期ならこの歌を分かってくれようが

貧しさは「怨む」べき「憂い」である。「身後の名」もそれを救えず、知己の存在も期待できない。最後の二句は「詠貧士」其の一で「知音苟も存せずんば、已んぬるかな何の悲しむ所ぞ」と変奏される。

とはいえ陶淵明のテクスト群の総体は、避けようもなく「己れに在る」貧しさを、己れの力で乗り越えようとする人物の像を提示する。「身後の名」や現在の知己を信じ得ない人物の目は過去に向かう。「餒えや已んぬるかな、在昔に余に師多し」（「会す有りて作る」）、「何を以て吾が懷いを慰めん、古えより此の賢多きに頼る」（「詠貧士」其の二）、「誰か云う固窮難しと、遑かなるかな此の前脩」（同其の七）。「詠貧士」七首には「貧に安んじ賤を守」（其の四）った「前脩」たちが描かれる。貧しさを乗り越えるよすがは、「貧」が「苟得」よりも正しいというお題目ではない。具体的な肉体をもつて貧しさを生き抜いた死者たちの幻影である。今ここで貧しさを生きた語り手の像も、や

がて死者たちの列びに重なり融合していく。

陶淵明のテクストは貧しさを「徳」にしないが、「己れ」が貧しさを乗り越えようとする姿は描く。貧しさを「己れ」自身との関わりで捉える必然の結果である。このスタンスは、第一章に述べた農事への関わり方に通じている。だが、貧しさに対峙しそれを乗り越える姿を描く一点は、じつは揚雄の「逐貧賦」にも類似する。陶詩の中にも「清貧の操守を誇示する臭味がある」と評される所以である。

これに対し、束皙の「貧家賦」には此の臭味が感ぜられない^⑤。「貧家賦」が、貧しさそのものを外部からとらえるからだ。「原憲の厚德無く、民斯の下貧のみ有り。愁い鬱煩として処り難く、且に羅縷して自ら陳べんとす」と前置きして、賦は「陳べ」る。

有漏狭之草屋、
無蔽覆之受塵。
唯曲壁之常在、
時弛落而圧鎖。
食草葉而不飽、
常嘔噦於膳珍。
欲悲怒而無益、
徒弘鬱而独噴。

雨漏りのする狭いあばら屋はあるが
塵をよけるぼろのおおいは無い
いつもあるはずの曲がった壁も
ときどき崩れて（人を）押さえ付ける
草や葉を食べても腹一杯にならず
いつもごちそうに焦がれている
うらみ怒ろうとしても無益なので
ただぶつぶつと独りで腹を立てている

「下貧」は住と食の困窮に止まらない。

涉孟春之季月、
初春の最後の月を経て

迄仲冬之堅氷。
稍煎蹙而窮迫、
無衣褐以蔽身。
還趨牀而無被、
手狂攘而妄牽。
何夜長之難曉、
心咨嗟以怨天。

陶詩の「夏日は長えに飢えを抱き、寒夜は被無く眠る。夕に造れば鶏鳴を思い、晨に及べば鳥の遷るを願う」という一節を思わせる。だが「手は狂攘して妄りに牽く」の具体性は陶詩にまさる。さらに陶詩は、「己に在り何ぞ天を怨まん」と貧窮を自らの内にとらえるが、「貧家賦」は「心咨嗟し以て天を怨む」と、「怨み」を外部に叩きつける。

賁家至而相敦、
乃取東而償西。
行乞貸而無処、
退顧影以自憐。
街売葉而難售、
遂前至於飢年。

借金取りが来て賁め立てるので
東から借りて西に返そうと
外に出て借金を頼むが留守をつかわれ
戻って影を見ては自分を憐れむ
ひけらかして世に売り込みもできず
かくて飢饉の年となる

借金取りの責めまで描き込まれ、「飢年」の惨状は以下のように記される。

十一月の氷が結ぶ頃までには
しだいに縮こまり困りきり
身を覆うぬのこさえ無くなる
ベッドに急いでもふとんは無いのだが
（寝入れば）手が引き寄せようと動く
何と夜は長く明けやらぬことか
心で舌打ちして天を怨む

煮黄当之草菜、
作汪洋之羹餼。
釜運鈍而難沸、
くたくたの草を煮て
薄々のおかゆをつくる
釜はのろくさと沸きにくく

薪鬱結而不然。

至日中而不熟、

心苦苦而飢懸。

丈夫慨於堂上、

妻妾嘆於窻間。

悲風噉於左側、

小兒啼於右辺。

薪はぶすぶすと燃えない

昼になつても煮えず

心は苦々しく飢えがまといつく

夫は座敷でため息をつき

妻たちは台所で嘆く

悲風が左の方でうなり

子供が右の方で啼いている

現存の「貧家賦」はここで終わっている。貧窮の惨状を克明に描出するのは、それが「天」への訴えになつてゐるからだ。かくも酷い状態がここにある、これをどうするつもりなのか、という告発である。貧しさに自分がどう対処しそれをどう乗り越えるかという叙述は見当たらない。あるいは元来はあつたのかも知れないが、窮状を詳述する筆の迫力の前に、吹き飛ばされ、脱落したとみてよい。

陶詩は、窮状をわずかな言葉で点綴し、背後に広がる闇を読み手に想像させていた。窮状と、それに耐え乗り越えようとする「己れ」の姿とは不可分で、むしろ後者にこそ重きがあつた。だが、「貧家賦」は、窮状をほとんど「形似」の手法で述べ尽くし、その不当を告発する。両者の描き方の違いは明らかである。同じく貧しさをテーマとする晋代の張望や江逋の詩は、現存の形を見る限り、「貧家賦」の描き方に近い。陶詩の方が特異な存在だったのかもしれない。いずれにせよ、「貧」をテーマとするテクストでも、

陶詩の深く内に向くまなざしと、東賦の外部に突き刺さるまなざしとの差異は確認できよう。

三 「近遊賦」

東哲の風刺文学としてさらに挙げられるのは、「近遊賦」である。これが「司馬相如の『大人賦』を強烈に皮肉つた作品である」ことは、すでに松浦崇氏に卓抜な指摘がある。試みに「大人賦」(『史記』卷一一七司馬相如伝)と「近遊賦」の冒頭の部分を並べてみる。

「大人賦」

世有大人兮、

在于中州。

宅弥万里兮、

曾不足以少留。

悲世俗之迫隘兮、

竭輕拳而遠游。

乘絳幘之素蜺兮、

載雲氣而上浮。

建格沢之長竿兮、

總光耀之采旄。

垂旬始以為幃兮、

摧彗星而為髻。

世には大人がおり

「近遊賦」

世有逸民、

在乎田疇。

宅弥五畝、

志狹九州。

安窮賤於下里、

冥玄淡而無求。

乘輦輅之偃蹇、

駕蘭單之疲牛。

連捷索以為鞅、

結斷梗而作鞵。

攀藁門而高蹈、

錫徘徊而近遊。

世には逸民がおり

中央の地に住んでいる
館は万里にわたるが
わずかの間も落ち着け
ない

世俗のせせこましさを
悲しみ

さあ軽やかに飛翔し
遠く遊ぼう

赤い轍の白い雌虹に
乗り

雲に乗じ空に浮かぶ

格沢の気の長い竿を
立て

耀く気を集めた

羽飾りを結ぶ

旬始を垂れて

吹き流しにし

彗星を引いて

飾りとする

並べれば、「大人」の過大なスケールが滑稽に見え、「逸民」が「大人」以上の存在感を放ちだす。「逸民」が「九州を狭しとする」大きな心のゆえに「窮賤に下里に安んじ」得る人物として描かれているためでもある。

畑に住んでいる

館は五畝にわたるが

気持ちには九つの大地より

大きい

田舎の貧乏暮らしに

安んじ

恬淡と何も求めない

雑木作りのがたがたの車に

乗り

とほとほと疲れた牛に

引かせる

打った縄を綴って

むながいにし

切ったヤマニレを結わえて

しりがいにし

いばらの門に拠って

高く足をあげ

さあうろうろと

近場に遊ぼう

「近遊賦」の冒頭の叙述が「大人賦」のパロディであるように、「近遊」という題名も、「大人賦」によく似た「楚辞」の「遠遊」のパロディである。「大人賦」や「遠遊」はこの後、後漢の張衡の「思玄賦」(『後漢書』列伝卷四十九張衡伝)や西晋の摯虞の「思遊賦」(『晋書』卷五十一摯虞伝)などのエピソードを生む。「近遊賦」は、これらの末端に位置する形をとりながら、じつは本家の「大人賦」や「遠遊」のみならず、「思玄賦」や「思遊賦」をも風刺している。

「遠遊」「大人賦」「思玄賦」「思遊賦」は、いずれも主人公が「四荒を経営し、六漠を周流し、上りて列缺に至り、降りて大壑を望み」(「遠遊」) 全宇宙をめぐるさまを描き出したのち、主人公の帰着点を示して終わる。その帰着点が、「遠遊」や「大人賦」では次のようである。

「遠遊」

下崢嶸而無地兮、

上寥廓而無天。

視儻忽而無見兮、

聽愔愔而無聞。

超無為以至清兮、

与泰初而為鄰。

下は切り立つて地面が無く

上はがらんと空も無い

「大人賦」

下崢嶸而無地兮、

上寥廓而無天。

視眩眩而無見兮、

聽愔愔而無聞。

乘虛無而上彼兮、

超無友而独存。

(同上)

(同上)

目はくらくらと何も見えず（同上）

耳はほうつと何も聞こえない（同上）

無為を超えて 虚無にのつて

清らかさの極みへ 最上へ至り

根元（だけ）が はるかに友も無く

私となりびと 独り存す

「遠遊」では「泰初」だけが存し、「大人賦」ではそれすらない。視聽を絶した高みに、主人公は帰着する。

ところが「思玄賦」や「思遊賦」の主人公たちは、一旦「廓邊盪」として其れ涯無く、乃ち今天外を窮む（「思玄賦」）、「品物の終に魂を復するを觀、形已に消ゆとも氣猶お存す」（「思遊賦」）と最上の高みに達するのだが、そののち「離居を悲しみて心を勞し、情悁悁として帰るを思ふ」（「思玄賦」）、「懸かな舟の離離たるを眺め、旧都の謫謫たるを懷う」（「思遊賦」）と懷郷にかられる。それゆえ「思玄賦」と「思遊賦」の帰着点は以下のようになる。

「思玄賦」

續聯翩兮紛暗曖、
俟眩暈兮反常閭。
收疇昔之逸予兮、
卷淫放之遐心。

（中略）

墨無為以凝志兮、

入り乱れ飛び続ける暗い中を

めくるめく間にふるさとに帰った

これまでの奔放さを収め

節度なく遠くを思ふ心を抑えよう

静かに無為にして思いを凝らし

与仁義乎消搖。

不出戸而知天下兮、

何必歷遠以劬勞。

仁や義と連れだつて伸びやかに

門を出でずとも天下の事が解るのに

どうして遠くに旅して苦しむ必要が

あろう

「思遊賦」

路遂適兮情欣欣、

奄忽帰兮反常閭。

脩中和兮崇彝倫、

大道歸兮味琴書。

樂自然兮識窮達、

澹無思兮心恒娛。

路は尽きて思いはわくわく

たちまち懐かしい村の門に帰る

中庸を修めて倫理をとようとび

大いなる道に由り琴や書を味わう

自然を楽しみ不運と幸運を識り

淡々とらわれが無くなれば心はい

つも楽しい

求めるべきものは、遠くではなく、郷里の静かな生活の中にあるとする。だがそれでは何故、「四荒」「六漠」への遠遊のさまが、「思玄賦」では二千字以上、「思遊賦」では千字にもわたつて連ねられねばならないのか。翻つて重要であるはずの郷里の生活の描出は、「思玄賦」で百六十字、「思遊賦」で二十八字と、極端に短い。しかも「無為」「仁義」「自然」「無思」と抽象的な単語が並べられるばかりだ。「思玄賦」「思遊賦」は、「遠遊」「大人賦」に対して、外界よりも心境を重視する新機軸を出したつもりだろうか、構成の破綻が疑われる叙述となっている。

エビゴーネンたちのこうした難点を突くように、東哲の

「近遊賦」は、「思玄賦」「思遊賦」の終わったところから始まる。この章の冒頭に見たように、「近遊賦」の主人公は、がたがたのぼろ車で「下里」を進む。一旦「高蹈」はするが、それは「廻り徘徊して近遊する」ためだ。「近遊」の舞台である「下里」の描出は卑俗なまでに具体的で、観念性やヒロイックな匂いのする驢体は排される。

井則両家共一、井戸は一軒に一つ

園必去舍百歩

貫鷄毬於歲首、

収綏繯於物互。

其男女服飾、

衣裳之制、

名号詭異隨迭。

設緊襦以御冬、

貧汗衫以当熱。

帽引四角之縫、

裙為素条之殺。

「井則」四句は質素ながらも困らない生活を表すものか。五句目以下は「其の男女の服飾、衣裳の制」が通常と異なり、「裙は素条の殺為り」のように細かなことに拘らないことを言うのだろう。

晝兎啼於客堂、
設杜門以避吏。

婦皆卿夫、

菜園は家から百歩

正月には鷄卵をつらね

飾りひもをぎつしりのハンガーへ

その男女の装い

着るもののきまりは

名前が風変わりで入れ替わり

肌着をつなげて冬の寒さを防ぎ

汗とりシャツを大事にして暑さ対策

ずきんは四隅の縫いを引きつばなし

はかまは白布の切りつばなし

昼から子供が客間で啼いているが
門を閉ざして役人避ける

妻はみな夫を「あんた」呼ばわり

子呼父字。

子供は父の字をよぶ

「婦は皆夫を卿とし」については、『世説新語』惑溺篇の次の話が参考になる。自分をいつも「卿」と呼ぶ妻に、王戎が「妻が夫を『卿』と呼ぶのは礼において不敬にあたると注意すると、妻は答えた。『卿に親しみ卿を愛しているから卿を卿と呼ぶのです。私が卿を卿と呼ばずに、誰が卿を卿といましよう』」。王戎は東晉よりも三十歳ほど年長で、ほぼ同時代の人物である。『陔余叢考』卷三十六は「六朝以来『卿』とはおおむね目下の者への呼称である」とし、徐震堦は『世説新語』がこの話を惑溺篇に入れたのは、王戎夫妻は仲睦まじいが礼をなみしていると考えたからだ」と記す。賦の「婦は皆夫を卿とし」も、「下里」の夫婦の仲睦まじさと礼法への無頓着を表しているよう。

続く「子は父の字を呼ぶ」も、『世説新語』が参考となる。その言語篇に、孔融が曹操に捕らえられた時の逸話がある。我が子だけは助けたいと願う孔融に、九歳と八歳の子供たちが諭す。「大人は、ひつくり返った果の下に無事な卵があるのを見たことがありますか」。夙惠篇でも、飯を釜の中に落として台無しにした子供たちが、父親の陳寔に次のように言い訳する。「大人がお客様と話しているのを、盗み聞きしていました」。『世説新語』の時代に、知識人の子供たちは父を「大人」と呼んでいたようだ。少な

くとも「父の字」をしかに呼ぶことはあり得なかつたろう。つまりこの句も、「下里」の親子関係が、通常の礼儀から外れていることを意味する。最初の「昼に兎は客堂で啼き」も同じ趣旨の句である可能性が高い。

現存の「近遊賦」は、結婚式を描く次の四句で終わっている。

及至三農間隙、

遂結婚姻。

老公戴合歡之帽、

少年著最角之巾。

農閑期の

婚姻を結ぶ頃になると

ご老体は合歡の帽子をかぶり

若者は小さな角ずきん

婚礼に老いも若きも晴れ着で集まってくる。とはいえ「老公」の晴れ着が「合歡の帽」とは重々しさに欠ける。これも婚礼の作法からの逸脱を意味するものかもしれない。

だが、このテクストを編んだ東哲自身は、当代随一の礼の学者だったはずだ。礼学者が、礼法をなみする世界を肯定的に描くとはどういうことか。想起されるのは、嵇康や阮籍を論じた魯迅の次の言葉である。

だが実は曹操や司馬懿が有名な孝行息子であつたためしはなく、この（不孝という——引用者付加）名目で反対者を罰したにすぎない。かくて真面目な人はこうした悪用を礼教への冒瀆と考える。（彼らの）憤りは高じて、とうとう礼教を語らず、礼教を信じず、甚だしくは礼教に反対してしまふ。——しかしそれは表面に過ぎず、彼らの本心は礼教を信じて、宝物のよう

に思っていたのだ。

礼の専門家には、礼の本質が透徹して見えている。礼教を唱える現実の社会が、礼の本質に甚だしく背くものであつたら、彼は現実を拒むだろう。妻が夫に敬語を用い子が親を「大人」と呼びつつ、夫婦や親子が殺し合う社会。それよりは、「婦は皆夫を卿とし、子は父の字を呼ぶ」が仲睦まじい社会の方がどれほどましか。かくて彼は、現実の礼教社会をそのまま反転させた世界を描き出す。それが現実の虚偽への風刺となり得るからだ。

だが彼は、礼の本質がそのまま外化した世界を描けない。妻が夫に敬語を用い子が親を「大人」と呼び、しかも相互に仲睦まじい世界が、礼学者の理想であるはずだが、彼はそれを描かない。そこに、書き手の絶望の深さと、同時に、目前の現実に捉われそこに滞るまなざしの傾向を読みとることは、誤りではないだろう。

四 「補亡詩」

「勸農賦」は役人の不正を、「貧家賦」は貧家の窮状を告発し、「近遊賦」は偽りの礼教社会を当てこすっていた。韻文以外のテクストにも、現実を抉る目の鋭さは窺われる。「晋書」本伝の収める「田農を広むる議」は、農耕地と農

業従事者を増やす方策を建議したもので、六百余字に及ぶ。

「議」は、農耕地が不足している地域の第一として「三魏」を挙げる。「土狭く人繁きは、三魏尤も甚だしきに、猪羊馬牧、其の境内に布く」。人口過密な地域での牧畜業が農地不足に拍車をかけている。「(人は)曠野を楽しまず、人間に在るを食る。故に北土は畜牧に宜しからずと謂うも、此れ誠は然らず」。ついで北方の地が牧畜に適する理由を数え、「悉く諸牧を徙し、以て其の地を充たし、馬牛猪羊をして草を空虚の田に配ましめ、游食の人をして業を賦給の賜に受けしむべし」と献策する。不足地域の第二には「汲郡の呉沢」がある。「汲郡の呉沢の如きは、良田数千頃なるも、汙水停滯し、人は墾植せず。其の国の人に聞くに、皆通泄の功は難しと為すに足らずと謂う」。ではなぜ排水がなされないのか。「豪強の大族、其の魚捕の饒を惜しみ、説を官長に構え、終に破らず」。豪族が換金生産物を優先させるため、地方長官を抱き込んで堤を破らせないからだ。実状の指摘はどれも具体的で、それゆえ長編とならざるを得ず、現状をよく観察していると思わせる。

『太平御覧』巻二二は、『東哲集』から引いたとして次のような「議」を収める。「員外侍郎及び給事の冗従は、皆是れ帝室の茂親、或いは貴遊の子弟なり。若し悉く高品に従わば、則ち本意に非ざれども、若し郷議に精らかにせ

ば、則ち必ず降損有らん」。断片なので分かりにくい、ひとまず次のように解釈できよう。『通典』卷三十七晋官品や『宋書』卷四百官志下によれば、散騎侍郎や給事中は、第五品の「高品」で、貴族の起家の官として喜ばれた。だがそのため需要過多になり、定員外を設けるようになり、価値が下落し始めたという。「議」は説く。皇室や貴族の子弟を「高品」だということでこれら定員外の官につければ彼らは不満だろうが、九品官人法の本旨どおり郷里の清議を徹底させれば、彼らはもつと低い品官に降ろされるに違いない、と。つまりこれは、同時期の劉毅も指摘した「上品に寒門無く、下品に勢族無し」という現状を突き、その弊害を直諫したものと考えられる。

東哲のテクストの現実を突く筆致は、一様に鋭い。だがこれらの集積は、読み手に一種やりきれない感を抱かせもする。風刺の鋭さや描出の滑稽さに一旦は笑っても、読後に索漠とした思いが残る。視点が現実の醜さに固着し、読み手をのびやかさに誘う契機に乏しいからだ。「時人」に「鄙俗」と嫌われた所以もうなずける。

そうしたテクスト群の中で、唯一のびやかな美しさを湛えるのが、『詩経』の逸詩を補ったとする「補亡詩」(『文選』卷十九、尤刻本による)である。

『詩経』の逸詩を補ったのは、当時東哲だけではない。

『抱朴子』外篇鈞世篇や『世説新語』文学篇、『晋書』夏侯湛⁽⁴⁾によれば、東哲ほど年上の夏侯湛や潘岳も「補亡詩」を作っている。だが、劉孝綽の引く夏侯湛の詩や『芸文類聚』卷二十三の引く潘岳の詩は、東哲のそれに及ばない。たとえば夏侯湛の詩は次のようである。

既殷斯虞、

仰説洪恩。

夕定辰省、

奉朝待昏。

宵中告退、

鷄鳴在門。

萃萃恭譚、

夙夜是敦。

だが、同じく「孝子」の「戒め」を歌った東哲の「南陔」は、緑なす丘や魚の躍る水辺を織り込む。

循彼南陔、

言采其蘭。

眷恋庭闕、

心不遑安。

彼居之子、

罔或游盤。

啓爾夕膳、

絮爾晨餐。

深くつつしんで

父母の大きな恩を説こう

夕に寢床を整え朝にあいさつ

朝も夜もお仕えしよう

夜中に暇乞いをして

鷄が鳴けばもう入り口に

一心に教えを承り

朝も夜も心をこめて

あの南の丘で

蘭をつむ

家が恋しく

心が安まらぬ

あの部屋住みの子は

遊び回りはしない

(父母の)夕餉を良い匂いにし

朝餉をととのえるために

循彼南陔、

厥草油油。

彼居之子、

色思其柔。

眷恋庭闕、

心不遑留。

啓爾夕膳、

絮爾晨餐。

あの南の丘で

草がなやかに茂る

あの部屋住みの子は

父母の顔色を優しくうかがう

家が恋しく

心が安まらぬ

(父母の)夕餉を良い匂いにし

朝餉をととのえるために

有頼有頼、

在河之渙。

凌波赴汨、

噬鯁捕鯉。

嗷嗷林鳥、

受哺于子。

養隆敬薄、

惟禽之似。

島增爾虞、

以介丕祉。

かわうそだ かわうそだ

川のほとりに

波をしのぎ淵にもぐり

おしき魚をくわえ鯉を取る

かあかあと林のカラスは

ひなにえさをほおばらせる

(だが) 養うだけで敬わねば

鳥たちと同じこと

そなたのつつしみを一層深め

大いなるさいわいを受けるように

「南の陔」に茂る「蘭」「草」から父母への思いを歌い、

「河の渙」の「頼」から孝の教訓を導き出す。「興」の連想

作用を巧みに用い、最後は予祝で結ぶ。その形式も、穏や

かな内容も、『詩経』の補亡にふさわしい。孝子の姿は、

二首目の「白華」で次のように称えられる。

白華朱萼、
被于幽薄。
粲粲門子、
如磨如錯。
終晨三省、
匪懈其恪。

白い花と朱のうてなが
ひっそりした草むらをおおう
輝かしい世継ぎは
磨き抜かれる玉のよう
ひねもすが身をかえりみて
ためみなくつつしみゆく

白華絳跖、
在陵之陬。

白い花と赤い茎が
丘のすそに

蒨蒨士子、
湮而不渝。

美しい若との
泥の中でも汚れない

竭誠尽敬、
晝夜忘劬。

まごころとうやうやしさを尽くし
つとめ勵んで苦勞を忘れる

白華玄足、
在丘之曲。

白い花と黒い茎が
丘のすみに

堂堂処子、
無營無欲。

りっぱな御曹司は
あくせくせず欲も無く

鮮侔晨葩、
莫之点辱。

明け方の花のように生き生きと
一点のけがれもない

『詩經』に異なるのは、各章一句目の「白華朱萼」「白華絳跖」「白華玄足」という、自然物による色彩語の句中対である。『詩經』に色彩語の句中対は多くない。しかもほとんどが「素衣朱繡」(唐風「揚之水」)、「朱英綠騰」(魯頌「閟宮」)など人工物に限られる。自然物によるものは、管

見の限り「裳裳者華、或黄或白」(小雅「裳裳者華」)一例に止まる。加えて「黄」と「白」の対は、「白」と「朱」、「白」と「絳」、「白」と「玄」の対の鮮やかさに及ばない。「白華」は、「緑葉兮紫茎」(九歌「少司命」)や「丹茎白蒂」(宋玉「高唐賦」)、「文選」卷十九)や「朱華冒緑池」(曹植「公讌詩」、同卷二十)を経た後の詩であることがはっきり分かる。自然描写への志向は、第三首目の「華黍」にも窺える。

噩噩重雲、

黒々と湧く雲

輯輯和風。

そよそよとやさしい風

黍華陵嶺、

黍の花は丘のいただきに

麥秀丘中。

麦の穂は丘のなかくろに

靡田不播、

どの畑も種が播かれ

九穀斯豊。

九つの穀物が豊かにみのる

奕奕玄霄、

ぴかりと黒い空に

濛濛甘霂。

もうもうと甘い雨

黍稷稠華、

黍は無数の花を開き

亦挺其秀。

そののぎをものばす

靡田不殖、

どの畑も植え付けられ

九穀斯茂。

九つの穀物が茂りゆく

無高不播、
無下不殖。

種播かない高みは無く
植え付けない平地は無い

芒芒其稼、

參參其穡。

稽我王委、

充我民食。

玉燭陽明、

顛獸翼翼。

いちめんの穂並み
すらりとした爽り

わが王のたくわえを積み

わが民の食を充たそう

四時は調和し

道は明るくかがやく

小論第一章に挙げた小雅の「大田」に比較されたい。「華黍」は「我が王の委えを積み」と農事詩の伝統に沿いながら、人事に関わるモチーフをほとんど襲わず、春と夏の秋の田園の風景を描くことに筆を費やす。陶淵明の「勸農」第六章に較べても自然描写が多い。

「補亡詩」は、自らを『詩経』に似せながらも、自然の草木を『詩経』以上に鮮やかに描きだす。晋から宋齊へと至る六朝詩の、細やかで美しい自然描出を志向する流れの上にたしかに位置している。

むすびに

現実への痛烈な皮肉や風刺に満ちた「勸農賦」「貧家賦」「近遊賦」の書き手は、『詩経』という、今ここの現実ならざる時空を設定した時のみ、のびやかで安らかな言葉を紡げたように見える。

だが、風刺における手法と「補亡詩」における手法に似たところがないだろうか。風刺文学における対象の醜さや滑稽さの描出が、類似のテーマを扱った六朝までのどのテクストよりも、具体的に詳細であったことを想起されたい。その細密さはむしろ、同時代の張協や夏侯湛が自然を描く際に行っていた「形似」の手法に近い⁴²。六朝文学を特徴づける「形似」の手法が、礼学者、すなわち儒学者であった東哲のテクストにおいては、風論すべき現実を描く時に、屈折した形で表れたと考えられる。「形似」の手法が本来の自然描出に生かされた唯一の例外が、『詩経』に通ずる理想の世界を描いた「補亡詩」であろう。

痛烈な風刺を持ち前とする東哲の文学も、その手法においては、六朝「形似」文学の屈折した一環としてとらえ得るのではあるまいか。

（一九九六年七月二六日）

注

（1）『晋書』卷五十一 束皙伝参照。

（2）『通典』卷五十九。

（3）上田武「陶淵明と束皙」（『新しい漢文教育』一〇五—一七頁、一九九四年）。束皙についてはこのほか松浦崇「束皙の滑稽文学」（『古田教授退官記念中国文学語学論集』八二—

九九頁、一九八五年）があり、その「餅賦」「勸農賦」「貧家賦」「近遊賦」「玄居釈」に早くから着目している。先行の兩論に対し、小論は屋上に屋を重ねることになるかと恐れるが、束哲の文学への捉え方が兩論と必ずしも同じではないため、敢えて提示する。なお「玄居釈」については、拙稿「西晋の出処論」（『日本中国学会報』第四十七集四八―六二頁、一九九五年）の五六―七頁を参照されたい。

(4) 白川静「詩経に見える農事詩（下）」（『立命館文学』第一三九号九―三六頁、一九五六年）十一頁。

(5) 同右。

(6) 以下「詩経」は十三経注疏本による。

(7) 後半三分の一を、「邑老田父」が農業の重要性を語る件が占めるが、これは賦に勸戒の意義を持たせるための付け足しと見られる。ここにも農事それ自体は描かれない。

(8) どちらも「芸文類聚」（中華書局、影宋本）卷三十九。

(9) 「芸文類聚」卷三十九所収詩を、「初学記」卷十四で補い、「古詩紀」卷六十五で校勘した。

(10) 「芸文類聚」卷三十九所収詩を、「初学記」卷十四で補い、「古詩紀」卷六十八で校勘した。

(11) 「芸文類聚」卷三十九所収詩を、「初学記」卷十四で校勘した。

(12) 「千畝土膏紫、万頃陂色纁。嚴駕佇霞昕、滄露逗光曉」（梁武帝詩）、「皮軒承早日、豹尾弘游煙。地広重畦浄、林芳翠幕懸」（梁簡文帝詩）、「雨師清遠路、風伯靜遙天。分渠通沃野、激水入公田。草發青壇外、花飛蒼玉前」（張正見詩第三章）

など。

(13) 第一章「悠悠上古、厥初生民。傲然自足、抱朴含真。智巧既萌、資待靡困。誰其瞻之、実頼哲人」。第二章「哲人伊何、時惟后稷。贈之伊何、実曰播殖。舜既躬耕、禹亦稼穡。遠若周典、八政始食」。以下陶詩は、王叔岷「陶淵明詩箋證稿」（『芸文印書館、一九七七年』）による。

(14) 土屋文明「貧窮問答歌と貧家賦」（『アララギ』第四十九卷二号七―九頁、一九五六年）八頁にも「これは題は勸農賦であるが、内容は下級官吏の専擅の記述と見てよいだらう」とある。

(15) 「晋書」束皙伝に「嘗為勸農及黷諸賦、文頗鄙俗、時人薄之」。「黷賦」の逼真性については、前掲松浦論文に「湯餅が出来上がる過程がまた、実に生き生きとしている」（八八頁）と言及されている。

(16) 「晋書」卷九十二文苑伝王沈伝所収。

(17) 「晋書」卷九十四隱逸伝魯褒伝所収。

(18) 「芸文類聚」卷三十五。「初学記」卷十八、「太平御覧」卷七五七、卷七六二で補う。

(19) 清水房雄「貧窮表現の一類型」（『アララギ』第四十九卷六号六八―七二頁、一九五六年）七二頁。

(20) 同右。

(21) 「文心雕龍」物色篇に「自近代以来、文貴形似、貌情風景之上、鑽貌草木之中」、「詩品」卷上に「晋黄門郎張協：又巧構形似之言」とある。「文鏡秘府論」地巻「十体」には「形似体者、謂貌其形而得其似」と説明する。ただし「文心雕龍」

の記述からも知れるように当時「形似」という言葉は多く自然描写に対して用いられた。

- (22) 張望詩「荒墟人迹希、隱僻閭鄰闊。葦籬自朽損、毀屋正寥豁。炎夏無完綈、玄冬無暖褐。四体困寒暑、六時疲飢渴。營生愈瘁、愁來不可割」（『芸文類聚』卷三十五）。江連詩「葦門不啓扇、環堵蒙蒿榛。空瓢覆壁下、簞上自生塵。出問誰氏子、慙哉一何貧」（同）。

- (23) 「鋪陳」を主とする賦の様式と、「興」の伝統を持つ詩の様式との差異も考えられるが、むしろ、それぞれの様式が選ばれた必然性にこそ目を向けるべきだろう。

- (24) 「芸文類聚」卷六十四所収賦を、「北堂書鈔」卷一二七、「太平御覽」卷六八七、六九五、六九六、八九九で補った。

- (25) 前掲松浦論文九二頁。

- (26) もと「賦」字だが嚴可均「全晉文」に従った。

- (27) 「文選」卷十五にも収められるが、「後漢書」に従った。

- (28) この傾向は、魏晉の玄学の「重神而不重貌」「得意忘言」という趣旨に合致する。湯用彤「言意之弁」（『魏晉玄學論稿』二六、四七頁、人民出版社、一九五七年）、「魏晉思想的發展」の第二章「魏晉玄學之發生與長成」（同二二、三七頁）参照。

- (29) 「世說新語」惑溺篇第六條に「王安豐婦常卿安豐。安豐曰、婦人卿壻、於礼為不敬、後勿復爾。婦曰、親卿愛卿、是以卿卿。我不卿卿、誰當卿卿。遂恒聽之」とある。

- (30) 徐震堦「世說新語校箋」（中華書局香港分局、一九八七年）四九三頁に「世說列此事於惑溺門、亦以戎夫婦為篤而無礼也」。
- (31) 「世說新語」言語篇第五條に「孔融被收、中外惶怖。時融

兒大者九歲、小者八歲、二兒故琢釘戲、了無遠容。融謂使者曰、冀罪止於身、二兒可得全不。兒徐進曰、大人豈見覆巢之下、復有完卵乎。尋亦收至」とある。

- (32) 同夙惠篇第一條に「賓客詣陳太丘宿、太丘使元方・季方炊。客与太丘論議、二人進火、俱委而窃聽、炊忘簞葷、飯落釜中。太丘問、炊何不餽。元方・季方長跪曰、大人与客語、乃俱窃聽、炊忘簞葷、飯今成糜。（後略）」とある。

- (33) 「北堂書鈔」卷一二七に「着羅華之布衫、載穿頂之疎巾」、卷一二九に「若夫祭奠之醴、親里往來、服素裙之神徒、曳藍縷之登靈」、卷一四三に「多塩少鼓、嚮皆機閑」、卷一四四に「格餅正于三播」、卷一四五に「棋炙不過兩機」という断片が残っている。前二條は「衣裳之制」のおおらかさ、後三條は食生活の簡素さを言うものか。

- (34) 但實在曹操・司馬懿何嘗是著名的孝子、不過將這個名義、加罪于反对自己的人罷了。于是老实人以為如此利用、褻黷了礼教、不平之極、無計可施、激而變成不談礼教、不信礼教、甚至于反对礼教。——但其實不過是態度、至于他們的本心、恐怕倒是相信礼教、当作宝贝。（『魏晉風度及文章与藥及酒之關係』、魯迅全集第三集『而已集』五〇二頁、人民文学出版社、一九七三年）。

- (35) 東哲の後半生はいわゆる「八王の乱」のただ中であつた。『太平御覽』卷五九六に「元康元（二九一）年、楚王瑋」と賈后に族滅された衛恒への東哲の弔文が残っており「既に子の庭を聞えば、其の殯は十に盈つ」と葬送の様子が記される。『晋書』卷五十一王接伝によれば、衛恒は当時汲冢書校訂の

任に当たっていたが、完成せずに殺されたため、束皙がこれ
を継いだと言う。さらに同束皙伝は「趙王倫 相国と為り
(三〇〇年)、請いて記室と為さんとするも、皙は疾に辞し罷
帰し、門徒に教授す。年四十にして卒す」と伝える。束皙が
目の当たりにした「八王の乱」が、近親どうしの殺し合うい
かに無残なものだったかは、岡崎文夫『魏晉南北朝通史内編』
(平凡社東洋文庫五〇六、一九八九年)一六五―二二〇頁、
大室幹雄『桃源の夢想』(三省堂、八四年)三七―八五頁、
福原啓郎『西晋の武帝司馬炎』(白帝社、九五年)一九〇、
二九三頁に詳しい。

- (36) 『宋書』卷五十八謝弘微伝に、晋代のこととして「晋世名
家身有国封者、起家多拜員外散騎侍郎、弘微亦拜員外散騎」
とある。詳しくは宮崎市定『九品官人法の研究』(同朋舎、
一九五六年一版、一九七七年三版)一七三頁参照。

(37) 宮崎前掲書一七三頁参照。

(38) 同右二二九―三〇三頁参照。

(39) 『晋書』卷四十五劉毅伝。

(40) 『抱朴子』外篇卷三十鈞世篇に「近者夏侯湛潘安仁並作補
亡詩」、「世說新語」文学篇に「夏侯湛作周詩成、示潘安仁。
潘因此遂作家風詩」とあり、劉孝綽が「湛集載其叙曰、周
詩者、南陔、白華、華黍、由庚、崇丘、由儀六篇、有其義而
亡其辭。湛統其亡、故云周詩也」と付注する。『晋書』夏侯
湛伝にも「世説」と同様の記事がある。

(41) 夏侯湛の詩は本文に後述する。潘岳の「家風詩」は次のと
おり。「緇髮緇髮、髮亦鬢止。日祗日祗、敬亦慎止。靡專靡

有、受之父母。鳴鶴匪和、析薪弗荷。隱憂孔疚、我堂靡構。
義方既訓、家道類類。豈敢荒寧、一日三省」。

(42) 張協については『詩品』上品を参照。夏侯湛については拙
稿「夏侯湛の修辭」(『語文と教育』第九号―十三頁、一九
九五年)を参照頂ければ幸いである。

小稿は平成七年度文部省科学研究費補助一般研究(C)「中国西
晋の詩と文章における隠逸・遊仙・山水」の研究成果の一部
である。